

東海道五十三次の内

袋井宿～見付宿まで歩く

「ホテルルートイン磐田インター」の朝食は6時半から始まる。今日は2018年1月28日(日)。本日の天気は曇りで雨は降らない模様。雨さえ降らなければ曇りで上出来。

このホテルの1階にある「花茶屋」で7時過ぎに朝食をとり、8時15分までにホテル駐車場にいるバスに集合し、昨日ゴールした「どまん中茶屋」近くまでバスで行く。その広場でいつもの通り歩く前の準備運動をし、続いて本日歩く名所旧跡をウォークリーダー（随行案内者）から聞く。

江戸時代に袋井宿があったメインストリートまで歩く。

「旅人企画」のウォークリーダー（随行案内者）伊藤氏の説明を聞く。

『袋井宿は徳川家康が東海道五十三次を制定した時（1601年）に作られた宿場ではなく、元和2年（1616年）駿河、遠江50万石の徳川頼宜によって開設されました。江戸と京のどちらから数えても二十七番目の宿場町です。現代では「東海道と真ん中 袋井宿」のキャッチフレーズで人を呼び込んでいます。

最初に宿場が作られた時は、東海道五十三次の内では最も短い町並みで、東西五町十五間（約578m）でした。家数195軒、その内本陣3軒、脇本陣0軒、旅籠50軒、人口は男性379名、女性464名、合計843名でした。本陣は東、中、西と3軒あり、東（田代）本陣は壺番本陣と言われ、東本陣公園に門や庭園が復元されています。

その他、中本陣公園となっている中本陣、西本陣公園となっている西本陣など2箇所も、施設として全部は残っていませんが、復元された門や塀などが公園内に展示してあります。又、袋井宿場公園となっている所は袋井宿の中心に位置しており、イベントなどに利用されています。この街には他にも本町宿場公園があり、



袋井宿東本陣公園に建つ
東本陣の門（復元）



袋井宿 本町宿場公園にある
高札場（復元）

土塁や高札場があります』

昨日は「東海道どまん中東小学校」の校門前を通ったが、今日は「東海道どまん中西小学校」と木製の看板が架かった

袋井市立西小学校の校門前を通る。ここにも「東海道どまん中」をアピールする所があったのだ。びっくり。「どまん中」の、「どまん」を平仮名で書き、「中」のみ漢字を使うという処方にも感心する。東海道五十三次の真ん中を強調している事は小学生でもよくわかる。

西（京都）に向かって歩く。澤野医院記念館に着く。

ウォークリーダー（随行案内者）によると、この医院は江戸時代末期から開院し、昭和9年には病棟が建設され、地域の医療を支えてきたという。以前、東海道五十三次の蒲原宿を通った時に、国の登録有形文化財に指定されている「旧五十嵐齒科医院」を見学した。旧五十嵐医院の建物は大正三年に洋風建築を建て、大正時代から地域の医療を支えたというが、この「澤野医院」はその何代も前の時代から地域の医療を支えてきたと言うから感心する。「赤ひげ」先生だったのかな。病院建築の中を見ずに移動する。

江戸から数えて六十一里目の「木原一里塚」に来る。近く



袋井市立袋井西小学校の
東海道どまん中西小学校の看板



澤野医院記念館



木原一里塚



許禰神社内にある
木原一里塚跡の案内板

にある「木原きはらなわて騷古戦場跡」に着く。ここは徳川家康が武田信玄と戦った所で、「三方ヶ原の戦」の前哨戦がここで行われ、小競り合いを繰り返して家康が唯一負け戦を経験した所。負けた家康がぶざまな姿を絵師に描かせ、この絵を見ては戦の時に気を引き締めて戦ったという、いわく付きの場所だ。



木原大念仏の案内板

又、この地域では武田信玄の家臣笹田源吾がしのびで村を偵察に来た時、村人達が討ち取ってしまい、その後疫病が流行った事で村人が念仏を唱え、源吾の霊を弔ったのが「木原念仏」の始まりと言われ、袋井市無形文化財に指定されている。

この木原騷の案内板は「許禰神社」の敷地内に街道に向かって立っているのでよく見える。「旧東海道松並木」～「三ヶ野」～「大日堂」～「遠州鈴ヶ森」を見る。



大きな「見付宿」の案内板

昼食は何時もの様にバスの中で頂く。今日の弁当は「水月」と名前の入った仕出し料理屋さんの弁当で、雨降りではないので外へ出て、景色を見て食べる人が多い。

「江戸より六十二里」と書いてある「阿多古一里塚」を通過し、下り坂を下がりきると、びっくりする程大きな、遠い所からも良く見える立体看板があり、「これより見付宿」と書かれている。高さが12m程あり、横幅と奥行きが各4mくらいの檜の上に大きな看板が架かっている。

見付宿の街中に入り、本陣跡、脇本陣跡、問屋場跡等に立っている木製の看板を見る。そこには建物や門、塀等は何もなく、移動可能な持って歩ける木製看板があった。店舗の前にあるため、風が吹いても倒れない様に足元の台にコンクリートブロックが置いてある。本陣跡の看板には似合わず、少々がっかりする。

歩いていくと目の先に松本開智学校に似た、いかにも「明治時代の造りの建物」が見えてきた。本体建物が3階建てで、その上に太鼓楼が2階造りになっており、合わせて5階建ての高い建物になっている。

ウォークリーダー（随行案内者）の説明を聞く。

『明治五年（1872年）の学制発布を受け、明治五年八月にお寺二寺を仮校舎として開校。新校舎の建設を淡海国玉神社神官大久保忠利、古澤侑氏を中心に、町の重役達の協力により、資金調達が行われ新校舎が建設されました。この建物は名古屋の宮大工伊藤平右衛門に委嘱し、明治七年（1874年）



史跡旧見付学校



史跡旧見付学校断面図

十月着工、翌八年八月に竣工し、開校しました。この建物は、初め2階2層の木造疑洋風2階建てで、建物は間口21.8m奥行9.1mで、屋上に2層の楼が重ねられ、当時としては珍しい作りでした。基礎の石は、遠州横須賀城のものを移築しました。日本最古の木造疑洋風建築物で、昭和四十四年（1969年）四月にこの校舎と横にある磐田文庫が「国指定史跡」となり、昭和五十二年（1977年）校舎を解体保存修理し、完成しています』

ポーチ柱は丸柱、外壁は漆喰塗、窓は上げ下げの汽車窓、外部の木部は当時としては珍しいペンキ塗りで和風と洋風が混ざっている建築様式。階段も特徴ある手摺があり、お城の様に勾配がきつい。（当時の人の体格は小さいと思うが）

中の展示物を見学する。当時の近隣の地図、校舎の断面図、校舎建築中の写真、棟札、時間を知らせる太鼓、学校を作る資金集めの五ヵ年納期盛帳、習字や国語に当たる教科書、卒業証書、紙が貴重な時に使った石盤（昔、祖母に石盤の名前は聞いた覚えがあったが、現物は初めて見る）など、明治、大正、昭和の時代に使用した道具など、色々な物が展示してある。

学校の建物は長方形で上に高く、明治十六年に5階建てにしたと案内板に書いてあった。震災には大丈夫だったのか壁の中を見たいと思った。今まで良く保存されていたと思う。

すぐ横に淡海国玉神社があった。この神官さんが中心になってこの校舎を作ったのだなど、明治時代の教育者の熱意に頭が下がる。

姫街道分岐点から見付宿西木戸を通り西へ進んで行くと、右側に「遠江国分寺跡」と鉄柱製の表示板が建ててある。

ここを過ぎて進行方向左側に「府八幡宮」があり、大きな鳥居をくぐり中に進む。参道を曲がると楼門、その奥に中門、そして拝殿付き幣殿、本殿がある。入り口にある楼門は檜皮葺きの屋根で、最近吹き替えしたのか、檜皮が新しくきれいだ。純和風の作りで、組子や回廊がある隨身門は、県の文化財になっているという。江戸時代の建物の本殿には、江戸時代に作られた木造隨身像や、平安時代の八幡像も入っているというが公開されていない。敷地はかなり広く、たくさんの方が参拝に来られても大丈夫だ。今日は楼門の外側参道両脇で骨董市が開かれていた。

ウォークリーダーの話では『奈良時代に遠江国の治安



府八幡宮 楼門



本殿及び拝殿付幣殿

を願ひ、遠江守櫻井王が国府の守護神として、仲哀天皇、神功皇后、応神天皇の三神を祀りました。本殿は1617年二代将軍徳川秀忠の娘「東福門院」が寄進したものです』

府八幡宮を後にしてJR磐田駅近くのバス駐車場に行く、ここが本日のゴール地点になる。バスに乗車する前に、整理運動して手足の筋肉をほぐす。

長野では雪がちらつく天気だったが、静岡県はやはり暖かく、歩くにはちょうど良い天気恵まれた。

帰りのバス中では、良く食べ、水分補給し、話に花が咲いていたが、東名高速道から山梨県に入るところには、すやすやと静かになった。

長野県内に入り、諏訪湖SAで北信、東信、中信、南信とわかれ、北信、東信、中信の方が1台のバスに乗り、昨日と逆のルートで帰る。北信の方は長野IC近くの駐車場で下車、そのままバスは高速道に乗って上田、佐久方面に向かった。夜10時過ぎともなれば長野はやはり寒くなる。

次回（浜松宿～舞坂宿）に続く